



# 新潟の水辺シンポジウム 2021 & 大熊 孝 顧問出版受賞記念講演会

## 新たな自然観の形成に向けて！

### ～プロローグ映像～

NPO-法人新潟水辺の会の活動動画（毎日地球未来賞奨励賞受賞）上映

### 《第1部》

新潟水辺の会活動報告

鳥屋野潟での「新たな自然観」形成の序章

### 《第2部》

出版・受賞お祝いスピーチ

### ◇受賞記念講演◇

「新たな自然観の形成に向けて

～民衆の自然観 vs. 国家の自然観 & 都市の自然観～」



大熊 孝（おおくまたかし）

新潟大学名誉教授  
NPO 新潟水辺の会顧問  
1942 年生まれ。  
東京大学工学部土木工学科卒。  
専門は河川工学・土木史。  
『洪水と水害をとらえなおす』で  
2020 年度毎日出版文化賞 &  
土木学会出版文化賞受賞。



2021/7/23 潟あそびワークショップ【鳥屋野潟の湖上】



2021/7/23 潟あそびワークショップ参加者【鳥屋野潟湖岸】



2019～2021 空芯菜のイカダ栽培ファーム【清五郎潟】



2020 小学校の現地学習会【清五郎潟】

■主催：NPO 法人 新潟水辺の会

■日程：12月4日（土） 時間：13：30～16：30（受付13：10～）

■会場：朱鷺メッセ・中会議室（201） **右のQRコードでご案内します →**

■参加者：150人／事前申込者のみ ■参加費：無料（カンパ歓迎）

■留意点：新型コロナウイルス感染症対策のため検温や体調の確認、手指の消毒、接触確認アプリCOCOAのインストール、新潟県新型コロナお知らせシステムの利用等にご協力をお願いします。また感染症に関する社会情勢等により本催事の中止、定員やプログラムが変更になる場合もありますので予めご了承ください。

■問い合わせ：NPO 法人 新潟水辺の会 [info@niigata-mizubenokai.org](mailto:info@niigata-mizubenokai.org)

■申し込み先：右のQRコードから入れます →

NPO 法人 新潟水辺の会 <https://forms.gle/HUkJvtPXDzb72CR88>



会場案内



申込サイト

※ この事業は、TOTO 水環境基金及び（公財）山口育英奨学会の助成を受けています。



# 新潟の水辺シンポジウム 2021&大熊孝顧問出版受賞記念講演会

## プログラム

《司会》 梶 瑤子 (新潟水辺の会副代表世話人)

13:30 ~プロローグ映像~

新潟水辺の会の活動動画 (毎日地球未来賞奨励賞受賞) 上映

撮影・編集: 加藤 功 (新潟水辺の会副代表世話人)

ドローン撮影: 王 毅 (株)イーワン代表



水辺の会活動動画

《第1部》

13:45~14:40 新潟水辺の会活動報告&質疑応答

相楽 治 (新潟水辺の会代表世話人)

鳥屋野潟での「新たな自然観」形成の序章

14:40~14:50 ~ 休憩 ~

《第2部》

14:50~15:10 大熊 孝 著『洪水と水害をとらえなおす』出版・受賞お祝いスピーチ

田口 均 氏 (農文協プロダクション) : 出版経緯と毎日出版文化賞受賞について

栢本 拓 氏 (JR 東日本) : 土木学会出版文化賞推薦について

知野 泰明 氏 (土木学会土木史委員会委員長) : 土木学会功績賞推薦について

15:10~16:30 受賞記念講演&質疑応答

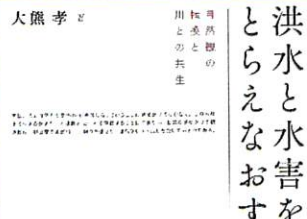
大熊 孝 (新潟大学名誉教授・新潟水辺の会顧問)

「新たな自然観の形成に向けて

~民衆の自然観 vs. 国家の自然観&都市の自然観~」

16:30 《総括と挨拶》

山岸 俊男 (新潟水辺の会副代表世話人)



大熊孝著 『洪水と水害をとらえなおす~自然観の転換と川との共生~』

■発行:農文協プロダクション 発売:農山漁村文化協会 <https://toretate.nbkbooks.com/9784540201394/>

○高橋 裕 (東京大学名誉教授): 洪水と水害を論ずれば当然ながら立ち向かう大波—伝統と近代化の相克—それを見事に泳ぎ切った著者ならではの快著。確固たる歴史観と地域特性の理解なくしては到達できない。

○内山 節 (哲学者): 民衆の自然観を破壊していった近代国家の自然観。本書は、それを見据えながら川と人間の関係を問い直す大熊河川工学の集大成である。

■第74回毎日出版文化賞(自然科学部門)を受賞 <https://mainichi.jp/articles/20201130/dde/014/040/005000c>

○選考委員 西垣通 (東大名誉教授・情報学)

【選評転記】地球温暖化のせいか、近年の気候はまさに異常だ。すさまじい豪雨が、この国のあちこちにむごたらしい傷痕を残していく。洪水や水害を防止するための知恵が今ほど希求される時は無い。本書はこのための第一級の指南書である。著者は河川工学の専門家であり、理論と実践の両面で、長年治水問題に取り組んできた。学者としての活動にとどまらず「新潟水辺の会」というNPOのリーダーの一人でもある。読み進めながらとりわけ惹(ひ)かれるのは、著者が「国家の自然観」に対して「民衆の自然観」を主張していることだ。これは共生の思想であり、江戸時代まで民衆の中に息づいていた。だが明治の開国以来、自然を統制管理するという西洋近代的な「国家の自然観」に置き換えられてしまった。治水ダム建設はその代表である。だが降水量の多い山国に、この自然観だけで果たして十分なのだろうか。流れゆく時間の中で河川と互いに関係を結び、被害を小さく抑える—そういう古来の知恵に学べという著者の洞察に深く心を打たれる。

